書評

## 見城悌治 編著

## 『社会を支える「民」の育成と渋沢栄一-未来を拓く、次世代を創る-』 渋沢栄一と「フィランソロピー」(6)

## 島田昌和

文京学院大学教授

「渋沢栄一と『フィランソロピー』」と銘打っ た全8巻を予定する壮大なシリーズの4冊目の 刊行本となる。ここで取り上げるのは「『民』 の育成」と表現する、渋沢の人材育成を題材と した1冊である。渋沢は、商業教育を中心に女 子教育を含め民間セクターの担い手となる学校 を多数支援し続けた。彼は、安田善次郎、大倉 喜八郎、浅野総一郎らと違い、自らの名を冠し た特定の学校を設立しなかった。設立した会社 に「渋沢倉庫」以外、渋沢の名を用いなかった のと同様,彼のスローガンの一つ,「合本主義」 と相通じた点である。そこにどんな一貫する理 念があったのか、支援するかしないか、どれく らいの資金と労力を投入するかについて、渋沢 の中で尺度があったか否かは、これまで分析さ れていない。

この本はそれに挑んだ野心的な編著本であり、これまで積み上げられた個別ケースの蓄積を十分踏まえつつ、それらに引きずられ過ぎることなく、新たなファクトと根底に流れる人材育成思想とを追い求めている。本書には、社会を構成する教育としてどのような教育機関が必要かという視点と、社会の担い手としてどのような素養を身につけた人材を送り出すべきかという、二つの問題を意識している。これは今の日本の教育が直面する問題とも十分重なる視点であろう。

「目次」は以下の通り。

序 章 渋沢栄一は教育に何を託したのか(見城 悌治)

第 I 部 商業者教育の展開と渋沢栄一の思想 第一章 ビジネス教育の高度化に対する渋沢栄 一の貢献一商科大学への昇格運動をめぐっ て一(山藤竜太郎)

- 第二章 渋沢栄一と水島銕也---商業教育思想の 平衡-- (井上真由美・玉井芳郎)
- 第三章 渋沢栄一の経営者教育-なぜ山辺丈夫 の主体的行動を喚起できたのか-(落合康 裕)
- コラム1 竜門社に学ぶ現代の実践家教育(落 合康裕)
  - 第Ⅱ部「社会」の広がりに伴う教育整備と渋 沢栄一の役割
- 第四章 第一次世界大戦と女性の社会進出一女 性紙の言説をとおして- (吉良芳恵)
- 第五章 日本女子大学校の寄付金募集と総合大 学設立運動(井川克彦)
- 第六章「底辺層」教育へのまなざし一下田歌子 との比較から一(何瑋)
- コラム 2 渋沢栄一による育英事業 (井上潤)

第Ⅲ部 未来を見すえた人材育成とその思想

- 第七章 渋沢栄一と福沢諭吉の教育思想一小学 校における道徳教育を中心に一(蔡珂)
- 第八章 講演録から見る教育観とその変遷(見 城悌治)

第九章 農業事業/農業教育を通じた渋沢栄一 の人材育成一渋沢農場・八基公民学校など を事例として一(三村達也・見城悌治)

コラム3 国士舘と渋沢栄一の教育思想 (井上真 由美)

コラム 4 亜細亜学生会と渋沢栄一 (陳彦君)

編者は「はしがき」で、渋沢が自分は教育に遠いものだが、普通の人に万般の知識を与えるべき役割を担っているという自己認識を紹介している(iv頁)。本書は渋沢研究会による『新時代の創造一公益の追及者渋沢栄一一』(1999年)で取り上げた教育分野、すなわち商業教育、女子教育、国際教育・平和教育、障害児教育を基本認識として踏襲している。そしてそれぞれの領域で検討の不十分なファクトの発掘や視点の提起を積極的におこなっている。

第 I 部の商業教育では、これまで東京高等商業学校(現・一橋大学)への関与と支援に偏重していた点を、神戸高等商業学校や企業内外での経営者育成に視野を広げている。第 II 部では、女子教育を中心に扱い、日本女子大学校の成瀬仁蔵を支援する渋沢という単線的な切り口になりがちだった点を、女性紙の言説、寄付金募集活動、他の女子教育者との比較などによって、多角的な検討を試みている。第 II 部は、これまで全般的に論じられたことがなかった渋沢の社会に対する教育観の表明を通した検討である。福沢諭吉との比較、渋沢の講演での言説、農業従事者の教育など、多様なアプローチが並んでいる。

以上からわかるように、これまでの研究成果をよく踏まえた上で、未検討または、見過ごされてきた視点や領域によく目配りして編成されており、渋沢の教育支援の研究水準を一段階高めた一冊になっている。

それぞれの論考について多少のコメントをしていこう。高等商業学校の大学昇格に関しては 従来、東京高商の帝大への吸収問題を絡めて、 独立した同格の民間ビジネスへの人材供給を重 視した視点から専ら論じられてきた。それに対し第1章は、あとに続く神戸高商と大阪商業学校の事例をあわせて検討している。東京高商の大学昇格が例外や別格ではなく、全国的に波及すべき先例なのかという点で、実に重要な考察であるが、渋沢の関与という切り口からすると、渋沢自身にそのような明確な意図を発見できず、問題提起に終わっている。

第2章は、渋沢と、日本の高等教育を先導し た一人の神戸高商校長の水島銕也とのつながり を考察する興味深い論考である。なぜなら、水 島は東京高商の卒業生であり、横浜正金銀行勤 務を経て母校の教壇に戻った上で神戸高商に赴 任したからである。東京高商初期の教育理念を 形づくった矢野二郎校長をもあわせて、商業教 育をいかにすべきかについての共通点と差異の 検討は実に重要である。結論として井上と玉井 は独善的と批判されてもいた矢野の家塾方式、 若手教員によるベルリン宣言での Captains of Industry という思弁的で架空の存在のどちら も俗悪に過ぎないと評する。それに対し水島は ゼミナールを通じたカリキュラム内の徳育を重 視し、両者とも商業教育のすそ野の広がりを意 識した上での大学昇格と、理念と現実性を兼ね 備えたと結論付けている。よく整理された論考 だろう。

渋沢のビジネスへの関与は、「合本主義」の 言葉に代表されるように、会社の立ち上げから 経営の安定化にむけて、経営者を育成しながら のものであった。第3章は、実務を介した経営 者教育に挑んでいる。経営史家でないことによ り新鮮な分析がなされているが、経営者が一本 立ちするのに必要な機能を渋沢が補い養成した ことはよく理解できるが、それを受容する側の 分析が物足りなく感じる。ここまでの学校教育 における人材育成とつながらないのも残念であ る。

第4章は、日本女子大出身の平塚らいてうを はじめとして、女性の社会進出を主張し始める 社会動向の中で女性紙にあらわれた言説を取り 上げている。渋沢の女子教育観の変化は記されているものの、全体的に間接的な論考という印象を否めない。

第5章は、日本女子大の財政基盤に焦点を当てた論考である。渋沢や森村市左衛門の大口サポートは有名であるが、出身者の平岡浅子とその実家筋の三井家、同窓会組織「桜楓会」の存在の大きさを強調している。しかしながら、後半で検討する大学設立運動とその挫折に関しては、結論がはっきりしないのが残念である。

第6章は、教育の行き渡らない層へ渋沢がいかなる視点を持っていたかという点を、実践女学校他を設立する下田歌子との比較によって論じている。渋沢の養育院での底辺層教育と下田による中流以下の女子教育への取り組みの対比や共通性を見出そうとする狙いは野心的であるが、そもそもの設定の難しさが感じられる。

第7章は、渋沢と福沢諭吉の小学校における 道徳教育思想の考察である。両者の思想対比は 以前より存在するが、小学校教育にスポットを 当てることにより、育成の目的やそもそもの立 場の差異が一層明確に表れている。対比の意味 を課題として残していて、論考の目的そのもの を揺るがせている。

第8章は、編者による執筆章で、本書の意図 がもっとも詰まった章かもしれない。多くの聴 衆を目の前にした講演は、はっきりした主張が 平易に語られていて渋沢の考えを捕まえやすい 記録である。そこに表われた教育観として、商 業教育で身につけるべきものとして商業道徳と 実務能力を挙げていて、高みで政治を論じるよ うな「漢学学生」を嫌ったことを指摘している。 また渋沢は、アメリカの教育システムに対して、 学生自身に学問を身につけさせ、よって学問を 活用できる教育になっている点を高く評価した。 一方、日本に対しては注入式教育として批判し ている。渋沢の教育観は時代とともに変化もす るが、国際社会の中で伍していくために国際道 徳を身につけなければならないという点は終生 変わらなかった。日本のビジネスが国際経済に

深くリンクして成り立っているが故に, その中で活躍できる人材の育成に注力しつづけたことがよく浮かび上がっている。

第9章は、渋沢の農業事業とその担い手の育成を取り上げている。この視点はこれまでおそらく検討されたことがなく、農業従事者に対してどう考えていたのか貴重な論考であろう。海外への移民や植民者の多くが農業従事者であったこともあわせて考えると、今後さらに掘り下げられるべき視点と言えよう。

挟み込まれたコラムでは、実務家教育の機能ももった竜門社、意欲と能力のある人材への教育の機会を広げた育英事業という学校教育そのものとは異なる教育支援を取り上げている。またこれまで関与が積極的に取り上げられなかった国士舘と亜細亜学生会にも焦点を当てている。多種多様な教育支援をおこなった渋沢の幅の広さを伝えてくれている。

中味の詰まった1冊であり、渋沢がいかに人 材育成に寄与したかをよく示す1冊となっている。 また、多様性ゆえに自らの教育理念が見えなく なりがちなところを、福沢や下田といった他の教 育者との対比によって近代日本の中での渋沢の 教育ポジションを浮かび上がらせる工夫がなさ れている。多少の注文をつけると、先に紹介し たようにその目的に成功している章と問題提起に 終わっている章が混在しているところが残念な 点である。それは同時に、これまで渋沢栄一を 中心課題として研究してこなかった研究者を積 極的に誘ったためということでもあり、研究の幅 を広げ、渋沢の残したものを相対化するために 必要な試みと考えたい。編者が序章の最後に記 した、渋沢が教育の提供をひろげることを通じ て社会構成員間の差を少しでも埋めることに最 大限尽力したことがよく伝わる書である。現代 の日本にこそ必要な国際社会で通用する人格と 実力を兼ね備えた人材育成という課題を提示し た、きわめて現代性のある書に仕上がっている。

(ミネルヴァ書房, 2021年4月, 202頁, 3,800円+税)